

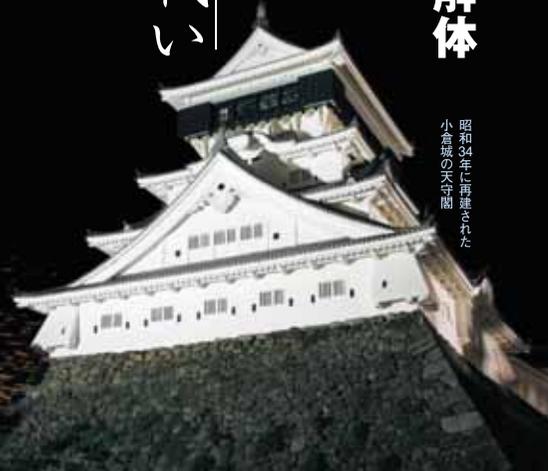


慶応2年(1866)8月1日、第二次長州戦争で小笠原藩は、自ら小倉城に火を放ち、戦線を引きつけた。小倉城は、天保8年(1837)の火災で全焼し、その2年後に天守閣を除いて再建。長州戦争当時、天守閣は存在しなかった。

高杉晋作率いる奇兵隊らと交戦し 幕府軍解体

小倉城炎上

藩主の死を伏せての壮絶な戦い 城を自焼し、香春に走る。



昭和34年に再建された小倉城の天守閣

遺体を城下に隠し
火急に備えた小笠原藩

「17日朝6時ごろ、白髮神井(伊方)でお参りをしていたら、大砲の音が聞こえた。合戦になったようだ。」

この地まで響いた戦の音、それを聞き、桑野庄三郎(伊方村)は急ぎ帰宅して情報を待ったと、「桑野家記録」に記されています。この合戦こそが小倉藩の動乱、ひいては大政奉還につながる「第二次長州戦争」です。「長州征討」「四境戦争」「幕長戦争」などと呼ばれ、その戦端は慶応2年(1866)の6月に開かれました。桑野庄三郎が聞いた大砲の音は、同日17日に始まった「小倉口の戦い」の砲撃です。

この2年前(1864)の7月に起きた「禁門の変(蛤御門の変)」で薩摩藩・会津藩と戦って敗退した長州藩は、朝敵(朝廷の敵)とされ、幕府軍が36藩約15万人を動員し、追討に乗り出します。禁門の変の翌月、関門海峡でイギリス・フランス・オランダ・アメリカの四国連合艦隊から砲撃を受けて、被害が著しかった長州藩は、幕府側が出した撤兵条件を受け入れ、「第一次長州戦争」は戦いを交え、いちおうの決着をみました。

しかし、翌年(1865)1月、長州藩内の革新派クーデターで状況は一変。高杉晋作が下関の巧山寺で兵をあげ、保守派政権を武力で追放し、倒幕政権を樹立させます。高杉らは西洋式

そのような中、9月に小倉・小笠原藩9代藩主・志幹が39歳で死去します。世継ぎの豊千代丸はまだ4歳。緊迫した情勢に対応するため、小笠原藩は志幹の死を伏せたのでした。遺体は薬液を入れた大甕におさめ、さらに頑丈な木棺で囲い、藩主寢室の地下に隠されたといいます。分家の小倉新田藩主・小笠原真正が、後見人として豊千代丸を補佐しました。

長州軍の猛攻に孤立 小倉城を燃やし香春へ

慶応2年(1866)1月、坂本龍馬が立ち会い、長州藩の桂小五郎と薩摩藩の西郷隆盛らが京都薩摩藩邸で会見、「薩長同盟」が結ばれます。この密約を知らない幕府は、長州藩に再三処分を受け入れを通告しますが、長州藩は回答を引き延ばし、着々と迎撃準備を進めました。11月、いよいよ処分に従おうとしない長州藩に対し、ついに幕府は諸藩を動員して征討軍を進発。6月7日に幕府艦隊の同防大島(山口県大高郡)への砲撃が始まり、「第二次長州戦争」の火が切れておとされました。6月18日には芸州口・小瀬川口(山口県と広島県境)、6月16日には石州口(鳥根県境)。6月17日には小倉口で長州藩を取り囲むように戦闘が開かれます。幕府軍約10万人以上、長州軍約4千人という、数でいえば圧倒的に長州藩が不利な戦いでした。

【高杉晋作】久坂玄瑞と松下村塾の双壁と称される。奇兵隊結成後、藩内保守派を力追放し倒幕政を樹立。第二次長州戦争に勝利した翌年27歳で死去した。(画像/港区立堀江資料館所蔵)



軍制を採用した民兵の奇兵隊など諸隊を整備し、兵学者・大村益次郎を登用して、新型の兵器を士佐の坂本龍馬らの仲介で配備。状況を認識していない幕府は、その後の処分に従わない長州藩を征討するため、14代将軍徳川家茂が大坂城に入りました。



小倉口の戦いでは、幕府老中・小笠原長行(唐津藩)の指揮のもと、小倉藩・肥後藩・柳川藩・久留米藩ら九州諸藩が、高杉晋作率いる長州軍と戦闘を展開。田川郡からも約3百人が動員されました。九州諸藩は一時互角の戦いを見せるものの、無理な出兵で士気が上がらず、軍備と機動力に勝る長州軍に押し上げられます。そのさなか、將軍・家茂が7月に死去。訃報を知った指揮官の小笠原長行は、持ち場を放棄し、戦線を離脱します。小倉以外の藩も随時撤兵し、孤立した小倉藩は長州軍の猛攻にさらされ、小倉城からの撤退を決めました。8月1日、小倉藩は城に火を放ちて戦線の後退。福智町の陣、香春へと退却します。世継ぎの豊千代丸と貞順院は、姻戚関係にある肥後の細川藩を頼り、熊本へと移りました。郷土の道は、逃げのひた藩士の家族や荷駄が行き交い、大混乱に陥ります。第二次長州戦争の影響はこの地だけにとどまらず、全国を動乱の渦へと巻き込んでいくのでした。



両軍の軍備差

長州軍はミニエー銃(写真上)ゲベル銃(写真下)を標準装備し、軍装も洋式で機動力に優れていました。一方、小倉藩は甲冑の軍装で機動力に欠け、銃も一部がゲベル銃を装備しただけで、あとは火縄銃という状態でした。火縄銃やゲベル銃が球形の弾を使うのに対し、ミニエー銃は銃身内部にライフルリングが施され、弾丸はシイの実型。射程距離と命中精度に決定的な差があり、両軍の軍備には格段の開きがみられました。[資料/小川忠文氏(山口県下関市)所有]

